

* 塔望遠鏡の屈折望遠鏡対物レンズ発見

国立天文台の塔望遠鏡の建物は昭和5年(1930年)2月10日に竣工している。建設は昭和3年(1928年)12月28日に始まっている。この工事は塔望遠鏡の建物の建設であって分光室の地下室はこの時すでに完成していた(天文月報第23巻第5号87ページ)。そして天文月報第24巻第10号197ページに塔望遠鏡のシーロスタットが新設されたという藤田先生の雑報が載っている。それから5年、天文月報第28巻第3号37ページに藤田先生の「東京天文台の塔望遠鏡に就て」という記事に据え付けがほとんど終わったとある。この藤田先生の記事は、1) 緒言、2) シーロスタット、3) 分光器械、4) プリズム分光器、5) 塔望遠鏡による観測という章建てになっており、望遠鏡本体について詳しい記述がない。レンズ(口径45糎、焦点距離14.5米)を通して45度の平面鏡に達するとのみ記述されている。

塔望遠鏡は昭和41年頃の観測を最後に深い眠りに入り、電気の供給も止められ、日食機材の輸送箱などの倉庫と化していた。今回、この有形文化財に登録された趣のある建物の有効利用を考え、雨漏りのするドームの修理、電力回復工事が終わったのを機に本格的な掃除を始めた。今回はこの望遠鏡の対物レンズ発見の記事である。

塔望遠鏡の光学系は何度か更新されているが、今回塔望遠鏡建設当時の望遠鏡レンズを発見した。このレンズがあったことは事実だし、紙に包まれ古い器械が入った木箱の上に無造作に置かれ、埃まみれになっていたことも知っていたのであるから、この発見という表現は不適当かもしれないが、何十年かぶり(おそらく50年以上)に人の目に晒されたレンズが写真1である。



写真1 2枚玉のレンズとレンズセル

塔4階の倉庫もどきにあった時の状態が写真2である。



写真2 輸送箱の上に無造作に置かれ、埃にまみれたレンズ

掃除をした分光室の光学素子のピアの上で包んであった紙をめくってみると曇りもなく美しいレンズが現れた。

レンズが置かれた部屋の片隅のコンクリート床の上に直接レンズセルらしきものも確認されていた（写真3）。



写真3 コンクリートの床に直置きされていたレンズセル

湿度の調節ない部屋ともいえないコンクリートの床に直接置かれていたので、痛みがひどいが、名盤はきちんと読める（写真4）



写真4 Carl Zeiss Jena Nr.13994 f=1442cm と書かれているセル口径を測ったものが写真5である。



写真5 レンズの口径は47cmの表紙である。セルのない寸を図ったものが写真6である。



写真6 セルの内寸は45.8cm